

お寺の本堂は近世公家屋敷の建物

藤田 勝也

都心では老朽化した古い建物は取り壊し、更地にして新築する、あるいは駐車場などとして土地の有効活用をはかる、いわゆるスクラップ & ビルドが、都市再生の有効な一手法とされている。たとえば京町屋は平安京に生まれた、日本で最初の庶民のための都市住宅である。京都の（日本の、あるいは世界の、といってもよいが）歴史と伝統を示す貴重な「文化財」である。にもかかわらず古くさいから世情にあわないからといっては取り壊し、最新設備のRC造のオフィス、マンションなどにとってかわる。「京都」らしい伝統的な景観、風情が町中から急激に消滅しつつあったのは、そう昔のことではない。

ところが最近では、「京町屋ブーム」らしく、簡単に取り壊すのではなく、カフェやレストラン、高級宿泊施設などとして有効に活用しようとする事例が結構あって、町屋に宿泊すれば日本文化を体感できるということで、海外からの旅行者には高額な宿泊料金でもたいそう人気があるらしい。また京都のある大学では伏見に京町屋のキャンパスを開設するという。テレビや新聞などマス・メディアでこうした事例が取り上げられることも増え、そのこと自体、まことに結構なことではある。

しかし少し考えてみれば、この京町屋のように、旧建物の用途を変えてさらに継続的に使用する、あるいは解体して別の地に移し、場合によっては改変の後、異なる用途の建物として再生、活用するなどといったことは、前近代の日本ではあたりまえの話であったことに思い至る。木造は、解体、移築、再建、改造という一連の行為を容易に行えるところに、きわだった特長がある。そして日本はもとより木造建築の国なのである。

木造建築の優れた伝統文化によりやく気付き、見直されてきたためなのか、このような営為に合理的、経済的な優位性が担保されるようになったからなのか、あるいはまったく無意識なのか定かではないが、とにもかくにもリノベ

ーションなどと、こういう時はなぜか横文字で、古い建物を改修、再利用するのがトレンド（＝趨勢、流行）である。

用済みになってしまった建物をすぐに破却してしまうのではなく、第二、第三の人生が送れるように大切に手当てをし、あるいは場所を変えて存続させる。昨今の京町屋のように大きく取り上げられることはなく、一般にはあまり知られてはいないものの、日本の建築の伝統文化が今なお健在であることを私たちに教えてくれるこのような建物は、ごく身近にある。

大阪の寺町はその名の通り古い由緒をもつ多くの寺院が集積する地域である。とはいえ昭和20年の大阪大空襲あたりはほとんど焼失してしまって古い建物は遺らず、現在見られるのはいずれも戦後で、中にはRC造の建物もある。その一角に鳳林寺（天王寺区六万體町）はある。

このお寺は天王寺寺町を形成した曹洞宗寺院の一つであるが、堂宇のみならず本尊、宝物等のいっさいが戦災に遭い灰燼に帰したのは周辺の諸寺院と事情を異にしない。しかし南の通りに面してたつ山門、そこから正面をこちらに向けて奥に見える本堂はなぜか古色を帯びた木造の建物で、江戸時代に遡ることは一見して容易にわかる（写真1）。

実は、本堂は昭和34年にこの地に建てられた戦後の建築なのであるが、しかし新築ではなく移築による再建であった。寺伝によれば、文久



写真1 鳳林寺本堂（大阪市天王寺区）

3年(1863)二條家当主の二條斉敬が関白太政大臣に任命されたとき、水戸藩の叔父徳川斉昭がこれを祝してたてた「宸殿」で、「銅駝御殿」「関白御殿」と呼ばれていたその建物を移築したものであるという。すなわち撰家である二條家の、京都の本宅屋敷における江戸時代の旧建物が現在見られる本堂なのである。ただしこの二條家の「宸殿」が鳳林寺の本堂に至るまでの経緯はやや複雑である。

17世紀中頃から幕末まで、二條家の本宅屋敷は今出川邸で、その位置は現在今出川通りをはさんで京都御所の北隣、学校法人同志社大学のキャンパスにあたる。明治16年この地に設立された平安義校は王政復古後の宮家士族の師弟を対象にした教育機関で、そのために今出川邸が貸渡されることになった。二條家は東京に移り、本宅今出川邸は空き家になっていたため活用されたわけである。銅駝御殿は旧公家や華族たちの集会所として用いられたという。その後、明治24年発足した平安義會は平安義校を閉鎖し、高等教育のための奨学金事業を開始する。今出川邸の土地・建物はこの平安義會によって管理され、建物はそのまま下賜、土地は払い下げられた。

遡ってすでに明治10年に同志社女子部が同志



写真2 同志社女子部の頃
むこうに見える瓦葺きの建物が銅駝御殿か



写真3 銅駝寮

社英学校の東部にあたるこのあたりの土地を購入していたが(写真2)、昭和21年に同志社は平安義會所有の土地・建物の購入を決定し、当該地一帯は学校敷地となる。そして昭和23年、銅駝御殿は同志社女子専門学校の寄宿舍「銅駝寮」として供用される(写真3)。しかしその10年後には鳳林寺へ売却されることになり、前記したように建物は翌昭和34年に移築されたのであった。

以上のように、二條家の本宅今出川邸の「宸殿」にはじまり、平安義校→平安義會→同志社女子専門学校、さらに京都から大阪の鳳林寺へ移され本堂となった。二條家の建物としては約20年だが、その後、平安義校、平安義會さらに鳳林寺本堂としての期間は各約50年をこえる。その間に女子寮として用いられることもあった。

こうした経歴から現本堂には増改築の痕跡が少なからず見られ、たとえば須弥壇正面の柱2本は本堂として再活用する際の新設で、背面には位牌壇を収納するための下屋が設けられた。そのほか改修箇所はあるものの、公家社会の最上位に位置する撰家の住宅遺構という出自は、なんとも穏やかな外観の印象にあらわれていて、お寺の本堂でありながら住宅的な雰囲気は今なお醸し出している。なお山門は薬医門で、二條家今出川邸の南西部にたつ表門がこれにあたるものと考えられ、本堂より古く天明大火後の再建によるものである。

いずれも内裏の周辺に位置した二條家を含む五撰家は維新後東京へ移転し、旧屋敷跡地の大半は現在京都御苑として整備されている。いっぽう建物は他所へ移築・再建されて現存し、鳳林寺本堂もその一つである。ほかに京都市内では府立鴨沂高校の正門や茶室、東山小松谷の正林寺本堂がいずれも九條家の遺構である。このような建物には解体・移築・改修の手が入っていて、創建当初の状態であることは少ない。しかし移築・改修の痕跡もまた個々の建物に固有の優れた再生・活用の履歴ととらえるなら、日本の建築の歴史と伝統をむしろよく表す文化財として、積極的に評価されるべきではないか。そのような想いもあって、とくに旧公家屋敷の建物について、遺構と文献史料の両面から現地調査を近年進めているところである。

環境都市工学部教授